



学研・教科の研究

体育・保健体育 ジャーナル

2023.2
第19号
Gakken

シンプルな授業で多様な学びを目指す①

～主体性を引き出す「課題並列単元」による授業づくりの提案～ 清水由 …… 1

主体的・対話的で深い学びの実現を目指した体育理論の授業 大谷麻子 …… 4

ICT実践レシピ Vol.5 …… 6

体育・保健体育と日常をつなぐ 保健室ギャラリー 第3回 …… 7

with Sports 平井美樹さん (放送・会議通訳者/スポーツ通訳者) …… 8

体育・保健体育に関する情報や、授業のヒントなどをお届けしてきた『小学校体育ジャーナル』、『中学校保健体育ジャーナル』は、合本となり『体育・保健体育ジャーナル』として生まれ変わりました。小学校、中学校の枠組みを越えて、系統性を踏まえた指導が重視されている今日に対応し、これまでよりもさらに充実した内容で、指導や子供たちの学びに役立つ情報をお届けしてまいります。

シンプルな授業で多様な学びを目指す①

～主体性を引き出す「課題並列単元」による授業づくりの提案～

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部准教授 ● しみず ゆう 清水 由

1 氾濫する教育キーワード

現行の学習指導要領は、その改訂時、学制発布（明治5年）以来の大教育改革といわれていました。その理由は「コンテンツベースからコンピテンシーベースの学びへの転換」にあります。おそらく、本誌を熟読するみなさんはよくご存じのことだと推察します。この大教育改革に伴い、数年で多くのキーワードが発信されてきました。パッと思い付くものだけですが、簡単に羅列してみます。

- 「Society 5.0」「VUCA時代」
- 「OECDのラーニング・コンパス2030」
- 「ウェルビーイング」「エージェンシー」
- 「21世紀型スキル」
- 「コンテンツベースからコンピテンシーベースの学び

- への転換」
- 「資質・能力の三つの柱の育成」
 - 「基礎的・汎用的能力の育成」
 - 「非認知能力の育成」
 - 「アクティブ・ラーニング」「AAR サイクル」
 - 「主体的・対話的で深い学び」
 - 「カリキュラム・マネジメント」
 - 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」
 - 「学習の個性化」「指導の個別化」
 - 「粘り強さ」「自己調整」
 - 「令和の日本型学校教育」
 - 「GIGAスクール構想（ICTの活用）」
- いかがでしょうか？ どれもなんとなく聞いたことがあるワードばかりではないでしょうか。誰かがそんなようなことを話していたな、どこかで書いてあるのを読んだな、と思い当たるのではないのでしょうか。も



もちろん、一つ一つのことに熟知していらっしゃる方も多いかと思いますが、こうやって並べてみると、本当に多くのキーワードが発信されてきたことがわかります。

未来を生きる子どもたちのために、これからの時代を展望し必要な力を学校教育で育んでいくことが望ましいことは自明のことです。しかし、これらのキーワードを実際に授業にするのは、なかなか難しいと思われるのが現実ではないでしょうか。

2 シンプルな授業で多様な学びを目指す「課題並列単元」

どんなに多くの重要キーワードが発信されてきたとしても、教育の最前線である学校現場で授業として実現できなければ、それは絵に描いた餅です。それも、通常の学校現場で実現しなければ本当の意味で改革がなされたとは言えません。体育授業を専門とする実践的力量的の高い教師だけでなく、まだ経験年数の浅い教師にも実現できる授業は、シンプルである必要があります。

多くの教育キーワードを踏まえたコンピテンシーベースの授業においては、シンプルな授業で多様な学びを目指したいと考えています。本稿では、一つの考え方として「課題並列単元」での授業づくりを紹介したいと思います。

体育授業をつくる（考える）ときは、目の前の子どもの実態を踏まえて運動の特性を味わえるようにスモールステップを設定したり、易しい課題から難しい課題へと単元を構想したりするかと思います。研究授業などで公開するときなどは特に、単元計画通りに授業が進むように気を遣ってきたのではないのでしょうか。筆者は、この単元計画通りに進む（進ませる？）授業に違和感を覚えてきました。授業者の思い（技術・戦術）と子どもの行い方・ルール・人間関係のギャップが見えたり、教師の思い（やりたいこと）をくみ取ろうと（正解探しを）する子どもの姿が垣間見えたりしました。公開授業ということもあって、そういう面が顕著に表れるのかもしれませんが、しかし、おそらく多くの先生方は日常の授業では、子どもの発言

や動きの様子に合わせて計画を臨機応変に変えて授業をしているのではないのでしょうか。

課題並列単元は、そのような臨機応変さを計画段階から組み入れる授業づくりの考え方です。単元全体の運動教材を決めたら、子どもがその運動教材で直面するであろう問題をできるだけ予想し、予想した問題それぞれに対する対応策やポイントを明確にします。単元計画の中では、どのポイントから押さえていくといった優先順位をつけず、全ての問題を並列に考えておきます。動きの何が問題でどのようなポイントがあるのか、といったことを子どもの思考に委ねるのです。

授業の流れはシンプルです。

- ①目標を設定する（運動の提示）
- ②やってみる
- ③うまくいかない、疑問に思うことを出し合う
- ④解決方法をみんなで考える
（②～④を繰り返す）
- ⑤振り返り（ICT 機器、授業外時間の活用）

①最初に**目標を設定**します。クローズドスキル系の授業であれば、できるようになりたい動きのイメージを確認したり、前時の解決できなかった問題に対して他の解決方法を探ろうとしたりします。オープンスキルの授業であれば、ゲームの行い方やルールについて確認したりうまくいかない（楽しめない・勝てない）原因や解決方法を考えたりします。

②それらを踏まえて**実際に動いて**みます。

③動いてみてうまくいったのか、いかなかったのかを考えて**問題を顕在化**します。うまくいったのであれば、自分（たち）なりのもっと（楽しむ、上手に、など）の方向性を決めます。うまくいかなかったのであれば、どこまでうまくいっていて、どこからうまくいっていないのかをはっきりさせて、子どもの問題を顕在化させます。「難しいねえ。どうしてできないのかな？」というような発問で、うまくいっていない、困っていることに目を向けさせるのです。

④顕在化された問題の**解決方法を考え**ます。教師の

発問に対してその子（たち）なりに考えたことを受け入れ、問い返します。「そうか。〇〇が問題なのか。どうすればそうならないようにできるかな？」という感じです。個人や小グループ（チーム）、クラス全体で考えます。自分（たち）なりの解決方法を決めて、②～④のプロセスを繰り返します。この繰り返すプロセスが試行錯誤であり、学びとなります。教師は一部の子の考えだけで進めないように、出された意見について「なるほど。みんなどう思う？」と一度全体に確認します。その上で「△△になるように気を付けてやってみよう！」と意識するポイントをまとめて、再び運動に戻ります。

この試行錯誤でのポイントは、顕在化された問題も決められた解決方法も、合理性を問わないことです。教師が合理的な問題点や解決方法がわかっている、子どもたちの思考に委ねるのです。子どもたちは、問題を見つけること・解決することの試行錯誤によって学び、資質・能力を身に付けていきます。

③や④の場面では、学齢などの実態に応じて考える視点を提供するなどの支援を行います。例えば、鉄棒運動では「準備姿勢」「回転（下まで）」「回転（上がるまで）」「上がったときの姿勢」という視点を示して、どの局面がうまくいって、どの局面がうまくいっていないのかを考えやすくします。

⑤この時間で問題としたこと、その解決方法と結果を**振り返り**ます。うまくいったのであれば、その先の課題（もっと〇〇したい）を促します。うまくいかなかったのであれば、次時で問題とした視点や解決方法を変えて考え直すことを助言します。

3 「課題並列単元」の授業で伸ばす資質・能力

課題並列単元は、資質・能力のうちの「問題発見能力」や「課題解決能力」を育むことを意図していますが、実際の授業について質問を受けることがあります。

①子どもが考える問題はそれぞれであり、多様化するのでは？

確かに問題は個々で違うので多様かと思えます。そ

うであったとしても、比較的多くの子のつまずきや多くの子が納得できる問題を優先順位をつけて共有します。その時間で焦点化されなかった問題は、次時以降で取り上げることになります。また、共有された問題に合わない子がいたとしても、それぞれの場に散らばって動きながら試行錯誤するときは、同じ場の仲間と共にその子にとって共有された問題が適しているかを判断します。違う問題を抱えていると考えられたら、そちらで試行錯誤をします。これは「自己調整力」につながります。このような自由度を保障することは、自分（たち）で問題と考えたことに向き合う（自己決定する）ことになるので、主体的に学習に取り組めます。

②適切なめあて（問題）を見つけられないのでは？

合理的な問題点や解決方法がすぐに見つけられなくても、見つけ直す試行錯誤が「粘り強さ」を育む学びとなります。基本的に、問題や解決方法を自己決定しているので主体的に粘り強く向き合います。「自己調整」や「粘り強さ」は「主体的に学習に取り組む態度」の観点に位置づけられています。また、適切な問題を見つけるために、友達の異なる視点から自分の考えを整理し関連付けて考えるという協働的な学びが実現できます。

③子どもに委ねると時間がかかりすぎるのでは？

上述したように「主体的」「協働的」に運動に向き合うので、思っている以上に短時間で教師が課題としていたことを問題として見抜いていきます。私の実践経験から言えば、これまでのやり方での単元の長さと同じかプラス α （1～2回）程度の時間で、同じような技能成果を得ることができました。

次号では、より具体的な授業のしかけや ICT 機器の効果的な活用について触れていきたいと思えます。

注）本稿では、アメリカの教育学者のジョン・デューイや「学力モデルの三層説」を唱えた広岡亮蔵の考え方を参考に、子どもが見つけたものを「問題」、教師が想定したものを「課題」としている。

主体的・対話的で深い学びの実現を目指した体育理論の授業

神戸大学附属中等教育学校教諭 ● おおたに あさこ 大谷 麻子

体育理論の意義について

公正、協力、責任、共生等が学びのキーワードとされ、主体的な判断に基づいて行動する力を育む保健体育科においては、これまで以上に「考え、議論する体育」への質的な転換が求められています。また道徳教育について「体育科、保健体育科の特質に応じて適切な指導をすること」が示されています。

普段の体育の授業の中では、作戦を考えたり、個人やチームの成果や課題について話し合ったりと、「考え、議論する」場面が単元の中にデザインされることが増えてきていますが、運動に関する領域だけでなく、体育理論の授業においても同様に、「考え、議論する」ことで学習の充実を図ることが大切であり、その工夫が求められていると言えるでしょう。

新型コロナウイルスの感染拡大は、オリンピック・パラリンピック東京2020大会をはじめ、スポーツイベントの延期や中止が相次ぐなど、スポーツの世界にも大きな影響を及ぼしました。また、生徒たちも、授業や部活動が行えなくなる経験をしました。予測不能な現代社会において、運動やスポーツとの関わり方やその価値、文化的意義についての学びを深める絶好の機会であると捉えて、生徒一人一人の心を揺さぶるような「考え、議論する」体育理論の授業を工夫したいものです。

本稿では、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した体育理論の授業実践2例を紹介します。

1 小集団学習

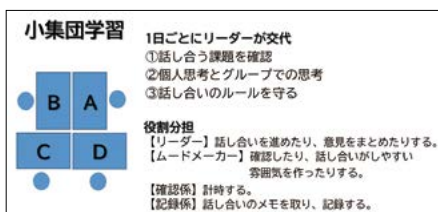


図1 小集団学習の約束事、役割分担

本校では、4人一組のグループを編成し、さまざまな教科においてグループ学習が行われています。グループ

では、それぞれに役割を持たせることで、学習や活動の活性化を図っています(図1)。

【第1学年】運動やスポーツの多様な楽しみ方

運動やスポーツではルールやマナーを守り、フェアに競うこと、世代や機会に応じてルールを工夫すること、勝敗に関わらず健闘を称え合うなどの行い方があることを、教師が提示して教えるのではなく、生徒の実際に起こった身近な出来事を題材として取り上げて、ルールの意義や必要性について議論しました。主な流れは以下の通りです(図2)。

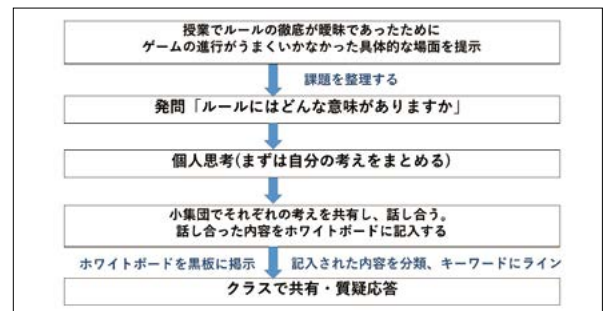


図2 単元「運動やスポーツの多様な楽しみ方」の授業の流れ



写真1 小集団で話し合い、意見をホワイトボードに書き込む

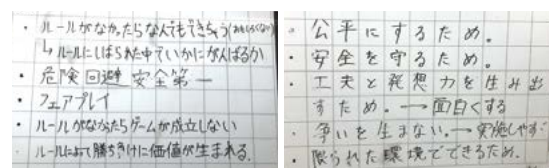


写真2 ホワイトボードに記載された「ルールの意味」

生徒は議論を通して、ルールはスポーツを公平に、安全に行うために必要不可欠であること、さらには、スポーツを面白くするもの、またスポーツの価値を生み



出すことにつながるものなど、ルールの意義や必要性について考えを深めることができました（写真1、2）。

今回の議論を通して理解を深めたことを、他の運動領域や体育的行事、部活動に関連付けていくことで、さらに学びを深めることができます。

2 P4C Philosophy for Children 子どもの哲学 (<https://kansai.p4c-japan.com>)

P4C (p4c) とは、Philosophy for Childrenを略したもので、「子ども哲学」「子どもの哲学」などと訳されます。本校では道徳科をはじめ、さまざまな教科でp4cを取り入れています。このp4cを体育理論で活用した例を紹介します。

【第3学年】文化としてのスポーツの意義

題材として、2019年に日本で行われたラグビーワールドカップを取り上げました。日本代表チームがベスト8となった快挙に日本中が沸き立っていたことやラグビーの掲げる理念が、スポーツの持つ多様な価値について考えるのにふさわしいと考えたからです。

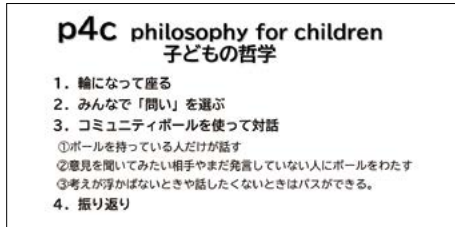


図3 p4cの進め方

授業では、選手の素晴らしいプレイへの称賛、ノーサイドの精神とは何か、スタンドでの敵味方を超えた応援が行われたことなどを共有した後、1枚の新聞広告に描かれていた「どうして、知らない国を応援したんだろう。」という言葉の問いとして、話し合うことにしました。以下に、生徒の発言を紹介します。

- 人は人が一生懸命に頑張っている姿を見ると応援したい気持ちになる。
- ラグビーはノーサイドの精神もあるから国に関係せずに互いにリスペクトしたいと感じるから。
- 応援することで選手と一緒に戦っている気持ちになれる。
- ラグビーそのもののルールや面白さを知り、自国を応援したいから見る、というより、スポーツそのものを楽しむために見ていたような気がする。
- 私たちは心のどこかで、相手のことをわかりたい、理解したいという思いがある。

図4 「なぜ知らない国を応援したのか」に対する生徒の発言

話し合いを通して、国際的なスポーツ大会がスポーツの持つ意義や価値を伝え、人々の相互理解を深めることで国際親善や世界平和に貢献していることについて理解を深めることとなりました。さらに、話し合うことで生徒の考えが広がり、次時の学習内容である「スポーツには人々を結び付ける文化的な働きがあること」につながっていくことにもなりました。



写真3 輪になって議論する様子

本校では、道徳科の授業でp4cを行う際は、生徒たちが問いを考え、生徒たちで何について話し合うか決めますが、今回紹介した体育理論での実践例では「問い」は教師が提示しました。それは、教科としての体育は、単年で身に付けるべき知識、育みたい思考・判断・表現する力などが明確にあり、それを評価するためには、教師が「問い」を決めることが必要であると考えたからです。

3 今後の展望

小集団学習もp4cのどちらの話し合いにおいても、日頃、体育に苦手意識を持っている生徒が議論に意欲的に参加する姿を見取ることができました。このように「考え、議論する」ことで運動やスポーツとの多様な関わり方を学ぶことにつながり、将来の豊かなスポーツライフを送るための礎となるのではないかと考えます。

カタールで行われたサッカーのFIFAワールドカップにおける日本代表チームの快進撃、試合後の清掃されたロッカールームに置かれた折り鶴、観客のごみ拾いなどさまざまな出来事が報道されました。また負の側面も見えた大会でもあり、生徒がその中で感じたことを「問い」として議論してみたいかがでしょうか。

時代とともに変化するスポーツの価値、また不変の尊い価値について考えることができると考えます。

GIGAスクール構想により児童生徒1人につき1台の端末が配備されたことを受けて、すぐに授業に取り入れられるおすすめのICT活用法をお聞きしました。

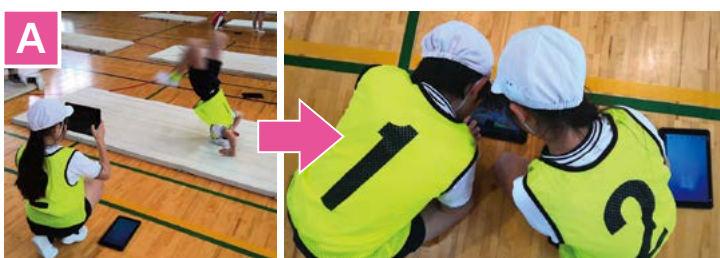
児童・教師の使用用途に応じたタブレットの活用

見つけて(課題発見)、考え(思考)、再チャレンジ(技能獲得)

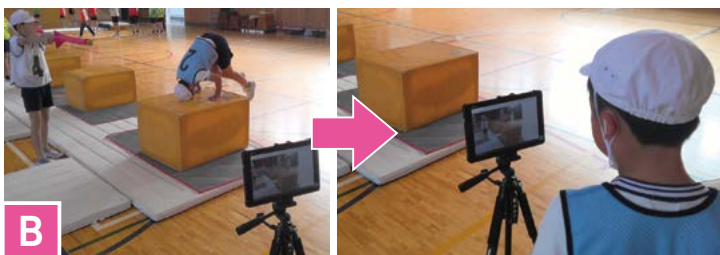


大阪府茨木市立東奈良小学校
吉岡 良太 先生

学年 4年 領域 運動 単元 マット運動・跳び箱運動



▲児童同士で動画を撮影し、確認し合う



▲自分の動きをすぐに確認する



授業後に、
一番うまくできた動画を
提出!

使用端末: FMV-NHB43Z
使用ソフト: ミライシード、
タイムシフトカメラ

具体的な使用用途

A 単元の序盤

教師による単元導入動画や手本の動画を全員で視聴する。

B 日々の授業で使い分け

- ①同じ課題解決の場の児童同士で動画を撮影・保存する。その後、交流を行い再度試技をする。(写真 A)
- ②定点設置したタブレットで遅延動画再生アプリを起動し、改善後の自分の動きを確認する。(写真 B)

C 児童の振り返りで活用

体育の授業終了後、その日の自分のベスト動画を教師に送る。(写真 C)

D 単元の終盤 評価

評価のときは、定点カメラの前で児童がグループごとにローテーションで試技を行う。

Point

Bの①は、児童同士がじっくり交流する際に有効です。自分の成長を確認したり、見本と比較したりすることで課題解決に向けた自身の考えの形成に役立ちます。

Point

Bの②は児童がすぐに見たい、すぐに動きを改善したいときに有効です。運動量の確保ができます。

Cでは教師が形成的評価を行い、授業構成の改善、クラス共通の課題を見つけ、児童一人一人に合った言葉かけに役立ちます。

Dはテストという緊張感をなくし、児童がのびのびした状態の試技で総括評価が可能です。教師が観察に専念しなくてよいので、最後まで練習する児童に有効な言葉かけが可能になります。

保健室の掲示物には、養護教諭の先生のアイディアが満載！教材や掲示物づくりのヒントにも！

小学校



北海道札幌市立平岸高台小学校
養護教諭
まえかわ のぞみ
前川 希 先生

11月8日の『いい歯の日』にあわせて、よくかんで食べることの大切さをテーマに作成しました。

かむことの効用を「ひみこのはがーぜ」という合言葉を使って紹介しました。かむ回数減少によって、顎が段々と細く小さくなっていく様子を視覚的に表しました。

かみごたえのある食べ物クイズでは、「プリンは軟らかいから違う。」「他にもタコなんかもそうよね。」など、自分の経験を基に楽しく遊ぶ子どもたちの姿が見られました。

関連⇒保健「生活行動が主な要因となって起こる病気の予防」



▲かみごたえのある食べ物クイズ。予想したものを右側のボードに貼った後で「せいがい」と書かれた紙をめくって答えを確かめる仕組み。



▲矢印を引っ張ると、それぞれの文字から始まる、かむことの効用が確認できる。

中学校



熊本市西原村立西原中学校
養護教諭
おくい たかこ
奥井 誉子 先生

▶トイレットペーパーの芯でできた飾りは別室登校の生徒と作成したものの。

11月8日の『いい歯の日』にちなんで、2学期後半を『歯と口の健康プロジェクト』として、給食後の歯みがきを呼びかけるために保健委員の生徒とともに作成しました。

掲示物の上段では、丁寧な歯みがきを促すためのポイントと、みがき方の説明をしています。下段の『むし歯の木』は、各学年のむし歯保有者の数を「むし歯ちゃん」で表示し、治療が終わったら「ハートの実」に替えるようにすることで、治療状況が一目でわかるようにしています。生徒はただ眺めるだけのものより、何らかの仕掛けがある掲示物のほうが興味関心をひかれるようです。「歯を丈夫にする食べ物」をクイズ形式にしたことで、「これじゃない？」と話しながら何度も挑戦する姿を見かけます。

▶歯を丈夫にする「たんぱく質の多いもの」「カルシウムの多いもの」「ビタミンの多いもの」をそれぞれ選択肢から予想する。めくると答えがわかる。

関連⇒保健「生活習慣病などの予防」





平井 美樹さん 放送・会議通訳者（スポーツ通訳者）

平井美樹さんは、テレビ局のニュース番組やビジネス交渉の会議などで活躍する通訳者。スポーツでは大相撲の英語放送や、オリンピック、サッカーやラグビーのワールドカップなどに携わる他、日本スケート連盟の通訳者も務める。時には選手に寄り添い、気持ちを代弁する役割もこなす平井さんに、仕事の奥深さややりがいを聞いた。

取材・文／荒木 美晴

スポーツの現場における平井さんの活動内容は、とにかく幅広い。大会で選手の通訳をする以外にも、オリンピック東京2020大会では要人の専属通訳を担当したり、ファンミーティングに同席したり。テレビ局での仕事では、選手のインタビューを取るために、スタッフと一緒にケーブルやマイクを持って駆け回ることも珍しくない。

日本スケート連盟の通訳も務める。フィギュアスケートの場合は、記者会見やキスアンドクライ（採点結果を待つスペース）でのコメント通訳の他、選手のメディアトレーニングの講師も担当。外国人コーチや振付師の指導に気後れするジュニア世代の選手をフォローするために、自身もスケート靴を履き、リンクの上で通訳したこともあるそうだ。そして、国際スケート連盟の総会では、日本スケート連盟から派遣されて日本の代表者としてスピーチし、大きな注目を集めた。実は、通訳業界に『スポーツ通訳』という定義はないと言い、「もう『なんでも屋』ですね」と平井さんは笑う。

インタビューが苦手と言葉足らずな選手もいれば、故事などを引用してコメントする選手もいる。テレビの生放送では「残り10秒」で選手の声をもとめる、といった瞬発力も求められる。そのような状況でも、平井さんは選手がどういう意図でその言葉を発したのかを瞬時に判断し、伝えていく。それは意識ではなく、「語学的に穴が開いているところを英語で埋めてあげるイメージ」だと言い、競技を深く理解し、選手をよく知っていなければできないことだ。まさに「言葉の架け橋」であるプロの技だ。

ただ、いくら選手と距離が近くてもファンの立場であってはいけない。「発言者との信頼関係で成り立つ仕事です。通訳に個人バイアスはかけないし、そういう心遣いは逆にやってはいけないことです」と、プロとしての矜持を説く。

幼少期をカナダで過ごした平井さん。冬は自宅の裏庭に天然のスケートリンクを作り、そこで近所の子供たちと遊ぶことがコミュニケーションの一つだったそうだ。帰国後は文化や環境の違いに戸惑う中、町のアイスアリー

ナを訪れ、ただ氷の上を滑ることが癒しだったと振り返る。

通訳者の道を歩み始めたのは、大学時代にテレビ局でアメリカのスポーツ専門番組を翻訳するアルバイトをしたことがきっかけだ。そこから政治・経済、安全保障、エンタメなど、さまざまなジャンルに活躍の場を広げていった。

しかし、昨今は人工知能開発が進み、他言語の学習やコミュニケーションは自動翻訳機によって可能になり、「通訳者は、AIにとって代わられる職業である」とも言われる。危機感があるという平井さんは、こう話す。「私たちが生き延びる可能性があるとしたら、発言者の心や感情を読むこと、日本語独特の行間を読むこと、でしょうか。一言一句を訳すという面からは逸脱しているから、怖いし、失敗もしますが、通訳者としてはそこが“攻める”ところかもしれません。だって、言葉は生き物ですからね」

多方面で経験を積んできた平井さんが今、日本のスポーツ界の未来のために力を入れようとしていることがある。それは、「日本の外交力を高めるサポートをする」ことだ。

残念ながらスポーツ界においても、国益や政治的なことが絡み、各競技で日本人選手に不利と思われるルール改正がしばしば起こる。せっかく話し合いの場が設けられても、大事な1票を持っているにもかかわらず、言語の壁の問題で意見ができなかったり、語学力があっても発言しなかったりと、日本人の控えめな性格が悪い方向に働いてしまうことが多いのが現状だ。「交渉事って、生身の人間の果たし合いで、スポーツみただし、勝負どころがあるわけです」と平井さん。「だからこそ、通訳者として力添えし、間違っていると思うことは、ちゃんと手を挙げて阻止したい。そういう環境を、選手のために作っていききたいですね」

PROFILE ● ひらい みき

学生時代にスポーツニュースを翻訳するアルバイトから通訳の道に入る。NHKのMLB、NBA、NFL放送の通訳、広告代理店の社内通訳を経て、現在はニュース、国際関係、安全保障、企業買収からエンタメ、大相撲の英語放送までをこなす放送・会議通訳者。オリンピック、サッカーやラグビーのワールドカップにも関わる他、数多くのフィギュアスケートの大会で通訳を務める。経営者やアスリートのメッセージやイメージ戦略立案、メディアトレーニングも手がける。



▲最近では海外とのオンライン中継も多く、寝不足と戦っているそう。



▲競技後の記者会見の通訳中。記事にする記者のことも考え言葉を選ぶ。

学研・教科の研究

体育・保健体育ジャーナル

『小学校体育ジャーナル』（通巻106号）

『中学校保健体育ジャーナル』（通巻132号）

令和5（2023）年2月発行

発行人…甲原洋 編集人…麻生征宏 発行所…株式会社Gakken デザイン…宮塚真由美 表紙おビイラスト…丸山誠司 印刷所…（株）広済堂ネクスト

●お問い合わせは、「学校・社会人教育事業部」へ 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8 学研ビル

内容については▶TEL. 03-6431-1568（編集）

それ以外は▶TEL. 03-6431-1151（販売）

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>

●「体育・保健体育ジャーナル」のPDF版および電子版は、WEBページから。

